

牛島 大典

1. はじめに

現在、特別支援学校（肢体不自由）に在籍する児童生徒の障害の重度・重複化が進んでいる¹⁾。文部科学省（2022）が出している「特別支援教育資料」では、特別支援学校（肢体不自由）の重複障害学級在籍の児童生徒の割合は84.9%（小学部88.6%、中学部84.6%、高等部79.4%）であり、他の障害種の特別支援学校の重複障害学級在籍児童生徒の割合（視覚障害29.9%、聴覚障害22.9%、知的障害15.2%、病弱36.1%）と比べて高いことが示されている²⁾。

福岡県においても、「令和3年度特別支援教育資料」によると、特別支援学校（肢体不自由）重複障害学級の在籍児童生徒は78.5%（小学部83.5%、中学部74.5%、高等部72.9%）と、重複障害学級在籍児童生徒の割合は、全国平均がやや高いものの、ほぼ同様の傾向を示している³⁾。

筆者は40年間の肢体不自由教育とのかかわりの中で特別支援学校（肢体不自由）の現状と課題として、以下の2点を感じている。

第一に、重複障害学級に在籍している児童生徒の障害の重度・重複化及び多様化の課題である。重複障害学級に在籍している児童生徒は、肢体不自由に伴う運動障害だけではなく、知的障害や感覚障害、認知障害、言語障害など複数の障害を併せ有しており、それらが複合的に絡まっている。そのため教員からの働き掛けに対する反応が微弱である場合も多く、教員は児童生徒が発する反応を読み取ることが難しく、どのような指導を行ってよいかわからないといった事例が多く見受けられる。特に勤務経験が浅い教員から、指導に関して不安や戸惑いの声が多く聞かれた。

第二に、在籍する児童生徒の障害の重度・重複化、多様化する実態に応じた教員の自立活動の専門性の課題がある。国立特殊教育総合研究所(2003)によると、「自立活動の指導に関して、どんなことが課題であると思うか」という点について、「自立活動に関する専門性のある教員が少ないこと」「実態把握等で活用する様々な検査法に関する専門性をもった教員に限られている」等の回答が多く、このことから、「教育現場において、自立活動に関する専門性のある教員の不足など、教員の専門性が最も大きな課題となっていることが示唆された」と報告している⁴⁾。

このように、特別支援学校（肢体不自由）で教員の専門性が課題として浮き彫りになる中、すべてに熟知

した一人の教員が自立活動のすべてを担うのではなく、所属する教員が児童生徒を中心に役割分担して、重度・重複化、多様化する児童生徒の実態に応じた教育活動を組織的に行う取り組みへと変化している。

しかし、実際に児童生徒の指導を行う教員は、対象児童生徒の障害の状態像が重度であり、かつ複雑であることにより、その学習上、生活上の困難が肢体不自由から派生する運動障害にとどまらず、学習関係の困難、コミュニケーションの困難、環境の把握の困難、健康の保持の困難など、多岐にわたる⁵⁾ため、目指す姿（長期目標）の設定や自立活動の指導に難しさを感じる教員も多い。また、近年では、小児医療や在宅医療の発達により、これまで対応したことがない診断名の児童生徒が新たに学校に在籍するようになったり、たんの吸引、経管栄養、導尿といった医療的ケアを必要とする児童生徒も増加したりしている。

その中でも特段の配慮を必要とする人工呼吸器を使用する児童生徒が複数入学し、在籍するなどの現状があり、日々の自立活動の指導や個別の指導計画の作成・実践・評価に対し、これでよいのだろうかといった悩みや不安を抱えながら自立活動の指導を行っている教員が多くみられる。中井・高野(2011)は、「特別支援学校における自立活動が抱える課題は、第一に教員自身の自立活動の専門的知識や技術に裏付けられた指導力の低下などの専門性の課題がある」と述べている⁷⁾。高宮(2017)も特別支援学校における在籍者の障害の重度・重複化、多様化が同時に進行しており、専門性のある教員の養成が課題となっていることを指摘している⁸⁾。このように、特別支援学校（肢体不自由）に在籍する児童生徒の障害の重度・重複化、多様化する実態に応じた教員の自立活動の専門性の維持・継承は喫緊の課題である。

本報告では、特別支援学校（肢体不自由）の経験が浅い教員（勤務経験年数5年以下）の自立活動の指導に関するアンケート調査を行い、教職経験5年以下の教員が抱える自立活動の指導上の困難さの実態を把握することで、今後の特別支援学校（肢体不自由）に携わる教員の自立活動の指導の専門性を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 対象および手続き

アンケート調査対象は、福岡県立特別支援学校（肢

体不自由) 6校の特別支援学校(肢体不自由)で勤務する教職経験年数が5年以下の教員45名である(令和4年度時点)。

(2) アンケート項目

アンケート項目は、表1に示す通り、フェースシート、自立活動における指導上の悩みや不安、それに対する支援してほしいこと、自立活動の指導で最も難しいと感じる内容から構成される。

項目の作成については、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2022)の【参考資料】教育的ニーズを整理するための調査事項の例(肢体不自由)及び一木・安藤(2010)の「指導目標設定の実際と指導の展望に関する調査」のアンケート項目を参考にした⁹⁾¹⁰⁾。

(3) 調査手続き

アンケート調査は、九州産業大学倫理審査委員会による規定に基づき実施した。研究の目的、調査データは厳重に保管され、統計的に処理されること、個人のプライバシーの保護については十分配慮し、迷惑を掛けないこと、知りえた情報は数量データ化し、統計的な分析にしか使用しないこと、データは厳密に管理すること、研究終了後も守秘義務については同様とすること、結果は研究以外の用途には使用しないことを管理職および回答者に口頭及び文書で説明した。

(4) 調査期間

令和4年10月下旬から令和4年11月下旬に実施した。

3. 結果と考察

(1) フェースシートの内容

1) 対象者の性別、経験年数：性別では男性が14名(31.1%)、女性が30名(66.7%)、答えないが1名(2.2%)であった。教職経験年数、特別支援学校の経験年数、重複学級担任の経験年数の平均は、それぞれ、教職経験年数6.69年(SD=8.43)、特別支援学校経験年数3.09年(SD=1.41)、重複学級担任経験年数2.27年(SD=1.44)であった。

また、特別支援学校以外の学校種で教職経験を積んだ教員が45名中13名含まれていた。

2) 所属学部：回答者の所属する学部は、小学部28名(62.2%)、中学部10名(22.2%)、高等部7名(15.6%)であった。

3) 主として担当する教育課程：準ずる教育課程5名(11.1%)、下学年適用の教育課程0名(0%)、知的障害特

別支援学校各教科等の代替の教育課程4名(8.9%)、自立活動を主とする教育課程36名(80%)であった。

(2) 特別支援学校(肢体不自由)経験5年以下の教員が自立活動の指導における悩みや不安について

日々の教育活動の中で自立活動の指導で悩んでいること、不安に思うことをについて、各設問で「非常にそう思う」④、「どちらかと言えばそう思う」③、「あまり思わない」②、「全く思わない」①と回答を求めた。併せて、「非常にそう思う」に4点、「どちらかと言えばそう思う」に3点、「あまり思わない」に2点、「全く思わない」を1点として得点し、それぞれの設問における平均を求めた。

特別支援学校(肢体不自由)経験5年以下の教員が自立活動の指導で不安と感じるものとしては、設問(2)の「児童生徒の実態把握が適切(正確)であるか不安である」が、④非常にそう思うが45名中25名55.6%、③どちらかと言えばそう思う17名37.8%、平均が3.49で、「難しいと感じるか」を尋ねた他の設問の平均より高い結果となった。

次に、自立活動の指導で難しいと感じる項目として平均が高い項目を順にみると設問(4)「児童生徒の学習活動・方法の設定」、設問(3)「児童生徒の指導目標の設定」、設問(1)「児童生徒の実態把握」、設問(6)

「児童生徒の長期的(学校卒業後)な目指す姿を見通し、目標設定すること」、設問(5)「児童生徒の成長や学習活動における変容を評価する」であったが、最も低い設問(5)3.11から最も高い設問(4)3.38と大きな差はなく、肢体不自由教育の教職経験の浅い教員にとってはどれも難しいと感じていると考えられる。

設問(7)「児童生徒が自立するための力を身に付けさせなければいけないのがわからない」は、平均が2.73で一番低かった。これは、指導している対象の児童生徒の障害が重度でかつ重複しているため、受け持っている児童生徒が将来自立するために必要な力として生命・健康の維持や運動・動作の改善・克服など限定的に捉えているためではないかと考えられる。

(3) 自立活動の指導で求める支援について

自立活動の指導目標及び内容を設定し指導する中で、自身が感じている不安や悩みについてどのような支援があればよいかを(2)と同じ方法で回答を得た。

自立活動の指導を行う上で支援してほしい内容としては、設問(4)「児童生徒に対する直接的な支援をしてほしい」と設問(9)「自立活動の指導を相談できるような自立活動専科の教員を置いてほしい」の2つが平均3.49で他の設問の平均と比べて高い回答であった。

表1 アンケート項目

「特別支援学校（肢体不自由）における自立活動の指導に関する意識調査」

1. ご自身についてお答えください。

- (1) 性別 ① 男性 ② 女性 ③ その他（答えたくない）
- (2) 教職経験年数（※令和5年3月末現在。）
特別支援学校の経験年数
他の学校種の経験年数（小学校・中学校・高等学校・義務教育学校・中等教育学校）
- (3) 重複学級（訪問教育を含む）担任の経験年数
- (4) 現在の所属学部及び学年（ 小学部 ・ 中学部 ・ 高等部 ）
- (5) 現在、主として担当する教育課程
（ 準ずる ・ 下学年適用 ・ 知的障害特別支援学校各教科等の代替 ・ 自立活動を主とする ）

2. 自立活動の指導であなたが感じている日々の悩みや不安についてお答えください。

以下の設問に、非常にそう思うは④、どちらかと言えばそう思うは③、あまり思わないは②、全く思わないは①に○で囲んでください。

- (1) 児童生徒の実態把握が難しい。
- (2) 児童生徒の実態を適切（正確）に把握したか不安である。
- (3) 児童生徒の指導目標の設定が難しい。
- (4) 児童生徒の学習活動・方法の設定が難しい。
- (5) 児童生徒の成長や学習活動における変容を評価することが難しい。
- (6) 児童生徒の長期的（学校卒業後）な目指す姿を見通し、目標設定することが難しい。
- (7) 児童生徒が自立するためにはどのような力を身に付けさせなければいけないのかわからない。

3 自立活動の指導目標及び内容を設定し指導する中で、あなた自身が感じている不安や悩みについてどのような支援があればよいかお答えください。

非常にそう思うは④、どちらかと言えばそう思うは③、あまり思わないは②、全く思わないは①に○で囲んでください。

- (1) 児童生徒の実態把握の方法や見方について支援してほしい。
- (2) 児童生徒の自立活動の個別の指導計画（目標設定や方法、評価を含む）について支援してほしい。
- (3) 自立活動に関する個別の指導計画や個別の教育支援計画などの引継ぎ資料を充実してほしい。
- (4) 児童生徒に対する直接的な指導方法を支援してほしい。
- (5) 自立活動に関する校内研修を充実してほしい。
- (6) 連携している医療機関、教育機関（教育センターや大学）からの自立活動に関する外部専門家など外部専門家のアドバイスを直接受ける機会がほしい。
- (7) 保護者や関係機関との連携方法について支援してほしい。
- (8) 自立活動に関する計画や評価を話し合う時間を確保してほしい。
- (9) 自立活動の指導を相談できるような自立活動専科の教員を置いてほしい。
- (10) 自立活動の具体的な指導内容を設定する際に参考になれる指導内容表がほしい。

4. あなたが、児童生徒の指導を行う際に最も難しいと感じる内容は、次のどれでしょうか。

- (1) 1つだけ選んで、該当する番号に○をつけてください。
 - ①運動・動作の指導（動作法等）
 - ②表出・表現する力を育てる指導（ICTやAT等の活用）
 - ③感覚・知覚の発達に関する指導（視覚障害、聴覚障害、視知覚障害への配慮）
 - ④姿勢づくりの指導（ポジショニング）
 - ⑤医療的なニーズへの対応に関する指導（関節拘縮や変形の予防、呼吸・摂食機能の維持向上等）
 - ⑥障害理解の指導（自己理解・自己管理・自己肯定感等）
- (2) そのように思われた理由についてお書きください。（自由記述）

表2 特別支援学校経験5年以下の教員が自立活動の指導で感じている悩みや不安

設問	④	③	②	①	平均
(1) 児童生徒の実態把握が難しい	17	24	2	2	3.24
(2) 児童生徒の実態把握が適切であるか不安	25	17	3	0	3.49
(3) 指導目標の設定が難しい	20	20	5	0	3.33
(4) 学習活動・方法の設定が難しい	22	18	5	0	3.38
(5) 成長や学習活動における変容を評価することが難しい	16	20	7	2	3.11
(6) 長期的な目指す姿を見通した目標設定が難しい	20	15	9	1	3.20
(7) 自立するために必要な力がわからない	7	20	17	1	2.73

表3 特別支援学校（肢体不自由）経験5年以下の教員が自立活動の指導で求める支援

	④	③	②	①	平均
(1) 実態把握の方法や見方	23	17	4	1	3.38
(2) 個別の指導計画作成	18	19	6	2	3.18
(3) 引継ぎ資料の充実	12	19	12	2	2.91
(4) 直接的な指導方法	25	18	1	1	3.49
(5) 校内研修の充実	16	24	5	0	3.24
(6) 外部専門家のアドバイスの機会	7	22	14	2	3.33
(7) 保護者・関係機関との連携	9	26	9	1	2.76
(8) 話し合う時間の確保	9	26	9	1	2.96
(9) 自立活動専科教員の配置	28	11	6	0	3.49
(10) 参考にする指導内容表	23	14	6	2	3.29

この2つに設問(6)の「連携している医療機関、教育機関（教育センターや大学）からの自立活動に関する外部専門家など外部専門家のアドバイスを直接受ける機会がほしい」（平均3.33）を合わせると、より専門性が高い職や立場の者から、児童生徒への具体的な指導・支援の方法を、直接教えてもらいたいという要望が高いと考えられる。

また、設問(1)の「児童生徒の実態把握の方法や見方について支援してほしい」も専門性の高い第三者からの支援を受けたいということにつながっていると考えられ、さらに、設問(10)「自立活動の具体的な指導内容を設定する際に参考にできる指導内容表がほしい」も平均3.29と高かったことから、経験が浅い教員にとって、何らかの直接的な指導・支援へのニーズが高いことが考えられる。

一方、設問(7)の「保護者や関係機関との連携方法について支援してほしい」は平均が2.76と最も低く、設問(8)の「自立活動に関する計画や評価を話し合う時間を確保してほしい」の平均は2.76、設問(3)で尋ねた「自立活動に関する個別の指導計画や個別の

教育支援計画などの引継ぎ資料を充実してほしい」は平均2.91で、これら3つの設問に対する回答の平均は2点台後半であった。保護者・関係機関との連携については、学級担任や学習グループを一緒に組んでいる経験豊富な教員と互いに話し合うなど組織的な対応があることで、経験の浅い教員の悩みや不安を軽減し、支えているためと思われる。

また、「自立活動に関する計画や評価を話し合う時間の確保」及び「自立活動に関する個別の指導計画や個別の教育支援計画などの引継ぎ資料の充実」については、それぞれの特別支援学校（肢体不自由）で年度当初や長期休業中にまとまった話し合いの時間を確保し、個別の指導計画、個別の教育支援計画を学年や学部が変わった際にも、引継ぎ資料として活用しており、経験の浅い教員を学校として支えるための仕組み（環境）が整えられ機能している結果と思われる。

(4) 児童生徒の指導で最も難しいと感じる内容

児童生徒の指導で、特別支援学校（肢体不自由）の経験の浅い教員が最も難しいと感じる内容を表4に、

その理由を表5（文末に掲載）に示す。

①「運動・動作の指導」が16名(35.6%)と一番多く、2番目に⑤「医療的なニーズに対応する指導」11名(24.4%)で、続いて、②「表出・表現する力を育てる指導」9名(20.0%)、③「感覚・知覚の発達に関する指導」6名(13.3%)の順であった。

特別支援学校（肢体不自由）の経験が浅い教員にとって、「運動・動作」の指導が難しく感じる理由を見てみると、運動・動作（身体の動き）の実態や目標設定が児童生徒一人一人違うこと、自立活動の指導は、全人的な発達の視点から自立活動の六区分の調和的な指導を求められるが、肢体不自由児の自立活動の場合、運動・動作の困難が他の生活上、学習上の困難に強く影響することから、指導内容が「運動・動作の指導」が主となること、併せて、運動・動作の指導を行うためには、乳幼児の発達の機序や反射・反応などの神経生理学、関節の可動域や筋肉の動きなど人体の構造の知識など幅広い専門性が必要であり、経験や知識が少ないと感じていた。⑤「医療的なニーズに対応する指導」を難しく感じる理由としては、保護者・看護職員との連携、医療の知識が必要、呼吸や食事といった専門知識が必要、体調の急変に対応できないといった回答の他、①「運動・動作」で難しく感じている理由と同じ理由が示されていた。このことは、児童生徒の障害の状態が重度・重複化、多様化する特別支援学校（肢体不自由）する中で、自立活動の六区分の一つである「健康の保持」が「身体の動き」とともに重要な指導領域として捉えられており、そのために経験の浅い教員にとって難しく感じる内容として挙げられたと思われる。

3番目に難しく感じられる指導内容として②「表出・表現する力を育てる指導」で、その理由として、ICT等の機器の急速な進歩と取扱いの難しさ、児童生徒の実態把握に戸惑っているといった回答がみられた。肢体不自由を起因とする運動障害等に伴うことばの指導の困難さよりも「指導する児童生徒の言語理解がどこまであるのかわからない」、「覚醒状態や環境に左右されやすい」等の回答が複数あった。これは、③「感覚知覚の発達の指導」の難しさと回答が同じ傾向であった。

(5) 悩みや不安の違い

他の学校種の経験の有無による自立活動における悩みや不安を尋ねた7つの設問全てで、他の学校種の経験がない者の群の平均が他の学校種を経験した者の群より高く、経験の有無によって、不安や悩みに違いが一定程度みられた。

設問(5)「児童生徒の成長や学習活動における変容

表4 児童生徒の指導で最も難しいと感じる内容

項目	人数
① 運動・動作の指導	16
② 表出・表現する力を育てる指導	9
③ 感覚・知覚の発達に関する指導	6
④ 姿勢づくりの指導	1
⑤ 医療的なニーズへの対応に関する指導	11
⑥ 障害理解の指導	2

を評価する」、設問(6)「長期的な目指す姿を見通した目標設定」、設問(7)「自立するためにどのような力を身に付けさせなければいけないのかわからない」の3つの項目では、他の学校種を経験した教員の群の平均が、経験がない教員の群の平均より明らかに低かった。これは、経験がある教員は、児童生徒の行動を観察し実態把握をする力を以前の教職経験の中で、ある程度身に付けているためではないかと思われる。

一方で、「実態把握」、「実態把握が適切か不安」、「指導目標の設定」、「学習活動・方法の設定」の4つの設問には、教職経験の有無による違いは他の学校種を経験したことがある者の群が、教職経験がない群よりも平均は低かったものの、大きな差がなかったことから、他の学校種の経験の有無とは関係なく、同じように不安や悩みがあると考えられる。

次に、所属学部による不安や悩みの違いについて述べる。

「実態把握が難しい」、「実態把握が適切か不安」の設問については、小学部に所属する教員が中学部、高等部に所属する教員よりも難しく感じていた。

このことは、小学部が就学段階から学校として最初に重度・重複障害のある児童を受け入れることと小学部が中学部や高等部の職員より実態把握(子ども理解)の面で専門性があり、その結果、多角的な視点で児童の実態を把握しようとしているからではないかと考えられる。

一方、「自立させるためにどのような力を身に付けさせなければいけないか」の設問では、小学部より中学部、中学部より高等部で難しく感じていた。学校以外の社会に送り出すことが近い学部ほど、卒業後の社会生活で自立に必要な力を身に付けさせるための指導をどのように行うか、どのような学習活動や、学校として内容を行っていけばよいのか悩んでいることを窺わせる結果であった。

(6) 自立活動の指導で求める支援の違い

他の学校種の経験の有無による自立活動の指導で求

める支援では、(8)「話し合う時間の確保」、(10)「参考にする指導内容表」、(9)「自立活動専科教員の配置」、(5)「校内研修の充実」の順に高かった。この4つはそれぞれの学校で工夫・配慮する物的環境であり、管理職を中心とした校内体制で全く教職経験がない教員が配置されたときに、さらなる整備が必要と思われる。

なお、(7)「保護者関係機関との連携」、(3)「引継ぎ資料の充実」は、教職経験の有無に関係なく平均が2点台であったことから教員をさせる機能がうまく働いていると思われる。(1)「実態把握の方法や見方」、(6)「外部専門家のアドバイスの機会」は経験の有無に関係なく必要な支援であった。

自立活動で感じる悩みや不安に対する支援についても10の設問中6つの設問で教職経験のない教員がより支援を求めており、残り4つの設問のうち3つの設問でほとんど差がなかったことから、学校としてより丁寧な配慮が必要であると思われる。

また、所属学部別による悩みや不安への支援については、3学部のうち、小学部の教員が10の設問のうち5つの設問で平均が高く、残りの3つの設問についても3点以上で、不安や悩みへの支援に対して要望が高かった。

中学部については(4)「直接的な指導方法」、(9)「自立活動専科教員の配置」がそれぞれ平均3.6、3.4であったが、6つの設問で2点台であった。

高等部については、3学部のうち4つの設問で平均が高く、10の設問のうち9つの設問の回答が3点台で、不安や悩みへの支援に対する要望の高さが伺えた。

小学部については、「自立活動専科教員の配置」、「参考にする指導内表」、「実態把握の方法や見方」、「外部専門家のアドバイスの機会」、「校内研修の充実」など専門性向上に関係する設問への要望が高く、高等部では「実態把握の方法や見方」「個別の指導計画の作成」「直接的な指導方法」「引継ぎ資料の充実」など直面する生徒への指導方法についてより具体的な支援の要望が高いと思われる。

4 おわりに

特別支援学校(肢体不自由)勤務経験5年以下の教員を対象に、自立活動の指導に関する悩みや不安、求める支援についてアンケート調査を実施し、検討した。

特別支援学校(肢体不自由)では、在籍する児童生徒の障害の重度・重複化、多様化から、医療の領域を含めた広範囲の知識や技術が必要であり、特に教職経験が浅い教員にとっては、日々の教育実践に対する悩みや不安が大きかった。そのため、自立活動に関わる「専門性」を向上させるため、「身体の動き」や「健康

の保持」、「コミュニケーション」といった区分での指導技術や実態把握の方法が重視され、学校では、カリキュラムマネジメントに基づく教育課程の改善の他に、校内研修や授業研究を重視し、「専門性」の維持・継承を図る工夫を行っていた。また、個別の指導計画の作成や話し合う時間を確保するなど、初めて肢体不自由に携わる経験の浅い教員を支え体制作りにも真摯に取り組んでいると思われる。

教職経験5年以下の教員から専門性の高い自立活動専科教員の配置や外部専門家との連携については高い要望があり、また、児童生徒のニーズも多様化していることから、教育だけではなく、医療や福祉、労働といった関係機関との連携も「専門性」として必要であることが考えられる。

今回は、教職経験5年以下の教員の自立活動の指導上の困難さの実態を把握することで、特別支援学校(肢体不自由)に携わる教員の自立活動の指導の専門性を検討するための資料を部分的に提示した。今後は、特別支援学校(肢体不自由)に携わる経験5年以上の教員の調査結果の分析と管理職の自立活動の専門性向上に関する調査を行い、肢体不自由教育に携わる教員の自立活動に関する専門性の検討を行っていききたい。

謝辞

本報告に御協力いただいた、福岡県立特別支援学校(肢体不自由)6校の先生方に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- (1) 古川勝也(2004)「肢体不自由養護学校における教育課程の現状と課題」独立行政法人国立特殊教育総合研究所『21世紀の特殊教育に対応した教育課程の望ましいあり方に関する基礎的研究：プロジェクト研究報告書：平成13年度～平成15年度』国立特殊教育総合研究所、pp.49-53。
- (2) 高宮明子(2017)「特別支援学校における在籍者の障害の「重度・重複化、多様化」に関する論考」、『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第7巻、pp.189-196。
- (3) 文部科学省(2020)「特別支援教育資料(令和元年度)」。
- (4) 福岡県教育委員会(2021)「令和3年度特別支援教育資料」。
- (5) 国立特殊教育総合研究所(2003)『「盲・聾・養護学校における新学習指導要領のもとでの教育活動に関する実際研究-自立活動を中心に-」報告書:全国盲・聾・養護学校における自立活動の指導に関する実態調査:平成14年度プロジェクト研究』国立特殊教育総合研究所。

- (6) 木船憲幸 (2011) 『脳性まひ児の発達支援』 北大路書房。
- (7) 中井滋、高野清(2011) 「特別支援学校(肢体不自由)における自立活動の現状と課題」 『宮城教育大学研究紀要』 第46巻、pp. 173-183。
- (8) 前掲書(2)。
- (9) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2022) 『障害のある子供の教育支援の手引:子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて』 ジアース教育新社。
- (10) 一木薫、安藤隆男(2010) 「特別支援学校(肢体不自由)における自立活動を主として指導する教育課程に関する基礎的研究:教師の描く指導の展望に着目して」 『障害科学研究』 第34巻、pp. 179-187。

表5 難しいと感じる理由

内 容	難しいと感じる理由
①運動・動作	<ul style="list-style-type: none"> ・体育や運動遊びの中で生徒の最大限の力を発揮させることが難しい。 ・正しい姿勢（正解）がわからないため、身体の状態を把握することが難しい。 ・児童の指導をする際に、自分の体をうまく使えないと感じる。 ・目指す姿によってアプローチが異なること、 ・細かい段階や目標・方法が自分自身理解できていない。 ・全て難しいと感じるが、運動・動作の指導が一番身近な課題である。 ・基礎的な動作を学ぶ機会がなく、どのように児童に合わせて指導すればよいか見付けることが難しい。 ・一人一人、身体の動きの面での難しさが異なり、実態把握から目標とする部分を見極めることが難しい。 ・どのように指導すると困難が改善・軽減できるかわからない。 ・自分自身の経験が浅く、実態が様々なためまだ知らないことが多くある。 ・関節や筋肉の動きなど身体のことは専門外なので。 ・まだまだ知識が少ない。 ・実態によって指導すべきところが異なり、本やマニュアルなど参考にできる文献が多くない。 ・自己流や他の先生のアドバイスをもとに活動を行っているが、もっとよりよい方法があるのではないかと疑問に思っているため。 ・身体が緊張して可動域が狭いため。 ・知識や経験が少ない。
②表出・表現する力	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の意思に直接関わることであり、把握しづらい部分でもあったりするため。 ・子どもからの表出を正しく読み取り、フィードバックできているか不安になるため。 ・動作については他の教員から指導を受けることがあるが、コミュニケーション面ではその機会がない。 ・スイッチやアプリなどの種類をもっと知りたい。 ・児童がどこまで自分の声を相手に伝えることができると理解しているかわからない。 ・覚醒状態や環境に左右されやすい内容のため。 ・ICT, AT使えるが、どのように子供を読み取っていけばよいのか、本当にこれで良いのか、刺激を与えているのか、子どもたちの成長に少しでも役に立っているか毎日悩んでいる。教育の奥深さや目の前の子ども達一人一人に対して、これで良いのだろうか悩む日々。
③感覚・知覚の発達	<ul style="list-style-type: none"> ・「読めない、書けない」という実態が身体面からきているのか認知面からきているのか、教材面の工夫の不足からきているのか見極めが難しい。 ・児童の感覚・知覚の実態把握が難しい。 ・視覚、聴覚、視知覚障害に対する指導法がわからない。 ・視覚、聴覚に障害がある子どもの指導経験が少なく、知識も不十分と感じているため。 ・どこまで見えているのか、聞こえているのかわからないので初めての指導の時に困った。
④姿勢づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸が不安定な児童を担任しているため、ポジショニングに課題を感じる。
⑤医療的なニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・身体の成長期と重なり、側彎の進行、医療的ケアによる保護者・看護職員との連携が不可欠。 ・拘縮している部位やその程度が様々であるため。 ・呼吸のしづらさや食べづらさを判断することが難しい。 ・経験が浅く、様々な実態の児童と学習や生活を共にするため必要があるため。 ・子ども達が安全に健康に過ごすための基本であり、医療的な知識が必要であるから。 ・医療的ケアを必要とする児童が多い学年のため、呼吸が安定していることが指導のベースになる。 ・正解がわかりにくいから。 ・ストレッチを行うことがあるため。 ・学習を進めていく中で医療的ニーズに対応できる時間を確保することが難しい。効率よく同時にできないか日々悩んでいる。 ・専門的な知識が少ない。 ・体調（呼吸等）の急変に対応できない。 ・子どもの実態によって対応が異なるため。
⑥障害理解	<ul style="list-style-type: none"> ・障害理解の指導を行ったことがない。 ・児童生徒の実態に合わせてどのように伝えたら良いかが難しいと感じる。